

トルコ語学習における諸問題

TOPLAMA OGLU A. Kamil

大阪外国語大学

はじめに

この発表では、まず大阪外国語大学トルコ語専攻の実際に筆者が行った授業で体験してきたトルコ語学習におけるいくつかの問題について述べたい。その後、これらの問題の解決方法を考えてみたい。

1. 動機付け

A) 就職活動時のトルコ語—日本の会社の体制

現在トルコには三井、伊藤忠、丸紅をはじめとして、多くの総合商社やトヨタ自動車のようなメーカーが進出している。いずれの企業も、トルコ国内で一定の評価を得ており、大学の新卒生にとっては重要な雇用先となることが期待される。しかしながら、これまでにこれらの企業に就職したトルコ語専攻の学生は非常に稀である。

周知のように日本の会社は、文科系の新入社員に社内教育を与え、学生時代に修得した知識などを求めない。会社の方針に学校のほうから異議を唱えるのは難しいがトルコ語能力のある社員が投資先の国で生活する上で、現地の部下、そして地元の人々の彼らへの評価も著しく高いにもかかわらず、会社の方針は中々変革しない。

受験生は願書を提出するとき、その動機が卒業後の就職活動でトルコ語能力を生かせるかどうかよりも、おもにトルコの歴史に触れたい、トルコを旅行する際に困らないといった程度のレベルである。

学生の動機が何であれ全責任は学生側だけにあるわけではない。教師あるいはトルコ研究者にも再考すべき点は多いと思われる。

B) 日本の大学におけるトルコ学の位置づけ

日本の大学ではトルコについて研究する者は、有志の学者

・研究者を除いて先進国の中では極めて少ない。それには歴史的・地政学的な理由があるだろうが、トルコ語学科も大阪外国語大学と東京外国語大学に限られており、その歴史はわずか15年程度に過ぎない。トルコ語の教師はこの現実を素直に受け入れ、今後トルコ語学習希望者の教育にさらに重点をおくべきである。

2. トルコ語の会話相手

トルコ語の学生はネイティブの教師とトルコ旅行で出会った人々との会話の機会を除いて、トルコ語で会話を交わす機会が非常に少ない。このため、授業では定期的にトルコ人留学生を呼んでティーチングアシスタントのような役割を担ってもらいなど、ネイティブとの会話の場を設けるのもひとつの解決策であろう。

3. 教師マニュアル

マクロレベルでは上述したような問題を解決するのは時間や予算などの問題上実現が困難であろうが、ミクロレベルでは、すなわち教室の中では、教師はどういう授業を行えば学生の学習成果を上げることができるだろうか？

まずはじめに教師マニュアルを作成し、各教師が自分が担当している授業で何をどこまで教えるべきかを明確にし、そしてそれに基づいたマニュアルを作成・厳守するべきである。無論、毎年必要に応じてこのマニュアルは改善されなければならない。

4. 明確な到達目標設定

教師マニュアルを作成するに当たって筆者の最も注視する点は明確な到達目標の設定である。今年から大阪外国語大学でも1年次、そして2年次において到達目標を設定し、2年目が終了した時点で学生がどのレベルまで学習したかが明記された。

C) 教師間の協力体制

到達目標を確実なものにするために教師間で協力体制を築くことが必要不可欠である。定期的に教師間で会合を開き、担当授業で目標値がどこまで達成したかを相談する。そして

達成できなかった場合、その原因はどこにあるかを探って改善策を模索する。しかし、授業担当者は教師である傍ら研究者でもあるため、教育と研究の両立が困難である。

D) 短期間の段階的な目標

到達目標を設定する際には、最長でも一ヶ月間ごとの段階的な目標を設定する。そうすることによって教師間の協力体制が保たれつつ、学生にも自分のトルコ語能力レベルが目に見える形になるであろう。

E) 教材選び

一昔前と比べて現在はトルコ語の教科書が増えた。現在、大阪外国語大学ではトルコのアンカラ大学TOMER(トルコ語教育センター)で使われている教科書を使っている。この教科書は既存の教科書の中でも総括的な、すなわち、会話・文法・読解を体系的に取り上げている。現在のところ、教師間で役割分担を決め、授業を行っている。しかし実際には、さまざまな理由で同時進行すべき科目で進度の差が生じてしまう。そうするとあらかじめ設定された目標に到達するには遅れが生じることになる。この問題は、役割分担を決めて授業を行ってから、まだ2年しか経過していないためにおこるのかもしれない。問題の解決には、まだ時間がかかると思われる。

i) 大阪外国語大学独自の教科書作成

既存の教材を使用しているが、やはり個人的には大阪外国語大学(大阪大学)トルコ語専攻独自の教科書を作成してひとつのエコールを目指したい。そのためにも他の教師の協力が欠かせないが、授業のやり方に関してまだ考え方の違いがある中でなかなか手をつけられない試みである。

F) 随時レベルチェック

段階的な明確な目標が設定され、教師間の協力体制も整えば、学生のレベルチェックが簡単にできることが期待される。例えば、一ヶ月間隔で小テストや口頭でレベルチェックをし、教師間で結果報告を交換するような体制が理想的だ。

G) 宿題は必要不可欠

レベルチェックは小テストだけに限らない。より効率的、

かつ明確なチェックは宿題を通してできる。教師には負担がかかるがより頻繁に学生のレベルがわかる。

5. 授業時間の長さ

H) 集中力を維持するには

日本の大学では授業は90分間と定められていて、外国語の授業もその例外ではない。15年以上にわたる教師経験からも、90分間という時間は実に長く感じられる。その理由は、平均60分が過ぎてから学生の集中力が著しく失われるからである。最初の30分間は効果的に教え込むための勝負の時間だ。

I) 一週間の授業科目数

大阪外国語大学では専攻語は一週間で5限ある。英語以外の外国語学習はABCから始まることを考えれば極めて少ない。一授業を50分にして、さらにコマ数を増やす必要がある。

6. 学生との接し方・授業のあり方

J) メールアドレスの公開

筆者は学生にメールアドレスを公開し、宿題をメールで提出してもらうことにしている。時間の節約にもなっているし、学生が自習時間に思いついた質問を素早く聞く機会にもなっている。

K) オフィスアワー

メールだけのやりとりで答えられない質問や発音などに関する問題は学生と直接会って問題解決に臨む。直接指導によってアドバイスの幅も広がる。

L) 補習の時間

現状の週5時間の授業構成からしてみれば1限ほどの補習の時間が理想で、授業中説明が足りなかった課題を取り上げ、適宜補足・解説を加える形で練習問題の答え合わせを行う。

M) トルコ文化談話

i) 日常生活から歴史までの総括的な意見交換

90分間の授業の中でトルコ語学習のみならずトルコ全般に関する質問なども受け付けて答えるようにしている。質問の内容はトルコ人の日常生活からトルコの歴史まで幅広く、時には答えに苦しむ質問もあるが、生徒のトルコへの関心を広げるという意味で不定期的にこのような授業も行う。

N) 学生が主役

i) 授業で質問しやすい教え方

生徒に質問しやすい雰囲気を作ることは重要である。4月新学期が始まるのと同時にできるだけ生徒と同レベルで接するが、学生たちはまだ若く未成熟な部分があるため、一線を越えないように心がけている。授業ではまず教師の方から質問し、初めは学生に向かって一方的になりがちであることを承知の上でコミュニケーションを図るよう心がけている。頻繁に「分かりましたか」と声をかけ、学生に質問する機会を与える。

ii) 可能な限り平等な時間の割り当て

当然ながら予習・復習する学生とただただ授業に出席する学生の間には差があるが、どの学生にも授業に平等に参加してもらうために教師から学生に対する質問をくじ引きで行う。学生の関心事はさまざまだが、トルコ語以外の質問にもできるだけ答える。

iii) 自己チェックで学習の進み具合を確認

やはり学生が授業の主役であるため、学生の学習レベルを自覚させるために同じような練習問題や課題を繰り返す。復習効果の傍ら、学生が自己チェックをしやすくする。

まとめ：

以上が筆者が15年以上経験したことを元にトルコ語学習における諸問題やその解決策について考えてみたものである。無論ここで取り上げた問題がすべてではない。これから、さらに多様な問題が起こりうるだろう。その節、新しい問題の解決に挑む所存である。